

# 廣池千九郎のモラルサイエンス研究をめぐる伝記的研究

——研究着手、執筆開始、「伝統」導入、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の完成、  
『道徳科学の論文』の完成・出版に至る過程——

立木 教夫

## 目次

はじめに

- 一 モラルサイエンス研究の前半期  
—大正二年から大正一四年五月二二日
- (一) 研究着手から研究内容が明確化してくる時期  
—大正二年から大正八年
- (二) 研究の進展と周囲の無理解に悩んだ時期  
—大正八年から大正一二年
- (三) 執筆開始と「伝統」導入の誓いに至る時期  
—大正一二年から大正一四年五月二二日
- 二 モラルサイエンス研究の後半期  
—大正一四年五月二二日から昭和四年
- (四) 「伝統」導入と第十四章の組み立てを完成した時期  
—大正一四年五月二二日から大正一五年
- (五) 謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の印刷に着手し完成を迎える時期  
—大正一五年から昭和二年八月一七日
- (六) 謄写版『ザ・モラル・サイエンス』に「訂正」を行って『論文』を完成・出版した時期  
—昭和二年八月一七日から昭和四年
- (七) 『論文』出版後に行った教導職辞職・神恵講返納と天皇陛下に『論文』を献上した時期  
—昭和四年一月から同年三月

むすび

はじめに

廣池千九郎は、いつごろモラルサイエンス研究を開始したのだろうか。この点については、『廣池千九郎日記』（以下『日記』と記す）や『モラル・サイエンス及びモラロジーの略説明』（昭和二年六月、『回顧録』一二五―一四四ページ。以下「略説明」と記す）に記されているが、研究開始の時期は、それに言

及した時期により異なっている。更に、モラロジーという学術語がつくられた後、モラロジー研究の起源が示されるが、それは「略説明」におけるモラルサイエンスの研究開始時期の説明とほぼ同じ時期になっている。モラロジー研究の起源は、『道徳科学の論文』（昭和三年二月二十五日。以下『論文』と記す）や「モラロジー研究の起源及び沿革の概要」（昭和六年二月、『回顧録』一四五―一五五ページ）等に詳しく述べられている。

なぜ、モラルサイエンス研究の開始時が、それに言及した時期によって異なっているのだろうか。これには、廣池と天理教の関係、モラルサイエンスに「伝統」を導入したこと、更に、モラルサイエンスという名称に加えて「モラロジー」という学術語が必要とされたこと等々が関係しており、説明を要する問題であると思われる。

\*

本稿では、このように複雑な様相を呈している廣池のモラルサイエンス研究に焦点を絞り、廣池の事蹟を手がかりに、研究着手、執筆開始、「伝統」導入、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の完成、そして、『論文』の完成・出版に至る過程を、伝記的に説明してみたいと考えている。

## 一 モラルサイエンス研究の前半期

―大正二年から大正一四年五月一二日

前半期におけるモラルサイエンス研究は、研究着手から数年の間は天理教教理の合理的・学問的研究を目指すものであったが、研究が進展し執筆を開始する頃には、人類的地平に立脚し、世界の人心開発救済を目指す道徳の科学的研究へと展開していったのである。

この前半期は、更に三つの特徴的な時期に分けることができ。それらは、(一) 研究着手から研究内容が明確化してくる、大正二年から大正八年の時期、(二) 研究の進展と周囲の無理解に悩んだ、大正八年から大正一二年の時期、(三) 執筆開始と「伝統」導入の誓いに至る、大正一二年から大正一四年五月一二日の時期である。以下、それぞれの時期について、詳しく見ていくことにしよう。

### (一) 研究着手から研究内容が明確化してくる時期

―大正二年から大正八年

廣池が四七歳から五三歳の時期である（年齢は数え年。以下同様）。この時期、廣池は、モラルサイエンスの研究に着手したが、その研究を推進していく上で、自己の人格向上の必要性を実感し、心の立てかえを誓い、講演活動と人心救済を手掛け

ることにした。その間に、モラルサイエンス研究は、次第に廣池の心の中で明確化してくることとなった。

### 研究に着手した年とその契機

廣池は、大正一五年五月の「謄写版を御高覧に供し奉るに就きて」と題する遺稿で、モラルサイエンスに「大正二年より着手」（「廣池千九郎博士関係資料」、以下＃と略す）したと述べている。また、大正一二年七月一〇日に華族会館で行われた講演の「講話要領」には、「大正三年以降専らモラルサイエンスの研究に従事す」（＃）と、集中的に取り組んできたことが記されている。

モラルサイエンス研究に着手する契機は、廣池が大正一一年一月四日に天理教本部で行った教団幹部に対する報告の中で、中山新治郎天理教初代管長と相談して決定し、開始することになったと明記されている。

「先管長公と研究の方針御相談決定。二つに分かつこと。

一はモラルサイエンス、一は教理。」（『日記3』三六ページ）

ここで一言注意すべきことを述べておきたい。それは、後年の回顧記事を手がかりに、モラルサイエンスの研究開始当時の

様子を探ることの問題点である。私は、廣池が初代管長と相談して研究方針を決定したとするこの記述の内容を、大正二年当時の資料で調べてみたが、該当するものを見つけないことはできなかった。モラルサイエンスという言葉も見当たらず、モラルサイエンスという語が最初から使われていたかどうかとも確認できなかった。ここに掲げた『日記』の記事は、数年後にモラルサイエンス研究が明確化してきた時点で、その研究の出発点を回顧して述べたものであり、最初は、モラルサイエンスという呼称を確定することなく、研究の特性を確認したうえで研究に着手したのではないかと考えられる。次第に研究が進展するにつれ、廣池の心の中で、今自分が手掛けている研究はモラルサイエンスと呼ぶことが相応しいと、名称が明確化していったのではないかと思われる。このように、本稿では、他の箇所においても同様に、後年の回顧記事も採用しながらモラルサイエンス研究の進展を跡づけていくことになるので、一言、注意を述べた次第である。

大正四年以降、モラルサイエンス研究は「箇人の事業」となる

廣池は、大正四年一月八日に行われた故中山新治郎天理教初代管長の追悼講演会で、初代管長と廣池の間で検討を重ねてきた天理教改善案、つまり、「教典、儀式の内容が甚深偉大なる

天啓の教えの全部を現わして居らぬものであるゆえに、これを改めたしという意見」を発表したところ、「外部にてこれを誤解し」、大きな問題へと発展してしまつたと記している（『日記1』二九二ページ）。このときの問題の深刻さは、例えば、「前宗教局長斯波淳六郎」が、天理教幹事の松村吉太郎に対し、「広池氏を逐わずんば、本部独立取消し運動をなし、且つ貴殿の一身上に容易ならざること出来致すべし」といった、痛烈な「恐喝」の語を以て廣池の引退を迫っていることから、窺い知ることが出来るだろう（『日記1』二八四ページ）。このような動きの中、廣池は「天理教祖の足跡を踏み、……黙して退く」（『日記1』二九二ページ）決意を固めるに至つた。ところが、四月九日に事態は急転し、「本部奥様、山沢先生と列席にて、予は信仰の上より神様に引きよせられたる身なり。然るに、「今、我々の時に至りて、あなたを逐い出すなど致しては、神様と御教祖様と先管長に対して相すまず。故にやはり留まりたし」（『日記1』二九三ページ）との言葉を以て引き留められ、廣池は「御地場へ留まる」（『日記1』二九三ページ）ことになつたのである。

この留まってほしいという要請は、天理教教理研究者として留まってほしいということであると思われる。その時、はたして、廣池が初代管長と相談して着手していたモラルサイエンス研究が含まれていたのかどうかは判然としない。しかし、廣池

が、大正一四年七月一日に、「モラルサイエンスは、大正四年以来全然箇人の事業になり居れり」（『日記3』一四六ページ）と記していることから判断しても、この時を契機に、本部におけるモラルサイエンス研究の位置づけが変化したことは明らかである。後にモラルサイエンス研究の取り扱いをめぐって本部との間に問題が生ずることになるが、その原因はここにあったのではないかと私は推測している。

廣池は、後年、この時期のモラルサイエンス研究を回顧して、「大正四年以降始めて具体的に『道徳科学の論文』（此時は単に書名をザ・モラル・サイエンスと称へて居りました）の内容の組織に著手し傍ら必要なる内外の書籍の購入に著手」（『モラロジー研究所紀要』第一号、三ページ。以下『旧』紀要と略す）したと述べている。実際には、大正四年段階では「ザ・モラル・サイエンス」という語は未だ使われておらず、後に謄写版が完成したときに、「ザ・モラル・サイエンス」という書名が与えられたことがわかつている。

#### 大正五年の「学文的研究は三年中止」という決断

廣池は、大正四年以降、『論文』、つまり、モラルサイエンス研究の「内容の組織に著手」と回顧したが、その当時廣池が抱えていた研究上の大問題は、自分自身の「心の立てかえ」の必要性であった。そのために廣池は、「学文的研究」を三年

間という期限付きで停止し、心を立てかえ、立てかえられた心を以て、「学文的研究」に取り組むことを決意している。

大正四年一月二八日には、「一切の研究、みな人を助くるためにするものなり」（『日記1』三三四ページ）と記し、大正五年元旦には、「決心」として、「一方には道を開き、一方には専門学を進めて、必ず必ず大成の域に達するを期す」（『日記2』三三ページ）と記している。しかし、この「決心」は、わずか半年後には変更され、大正五年六月六日には、「懺悔」として、「全く、心を立てかえて、御道おみち一筋の研究と、御道一筋のつとめとをさして頂くこと」、「法制史その他学文的研究は三年中止」（『日記2』二七ページ）と決定を下すことになった。廣池は、専門学とその他の「学文的研究」を一時中止して、「道」を中心とした「研究」と、「つとめ」、つまり、人心救済に集中することを決意したのである。ここで、モラルサイエンス研究は、はたして「三年中止」の対象に含まれていたのであろうか。私は、モラルサイエンス研究は含まれていなかったと考えられている。後程、その証拠を示したいと思っている。

### 講演活動―心の立てかえと人心救済の旅

『日記』には、大正五年から三年間、専門学に言及した記事は一つもない。廣池は、「全く心を立てかえ「る」」ことに集中すると述べたのであるが、具体的には何を行っていたのである

うか。それは、国民道徳講演会の講師として、日本全国を巡回して講演を行い、講演を通して人心開発救済を手掛けていたのである。

大正四年の困厄の直後から大正八年までの範囲で、主な講演活動を概観しておこう。

年月日	地方	『日記2』
大正四年五月一日から六月五日	中国地方	三〇五八（*）
八月一日から一〇日	岐阜県	〔廿〕
九月一四日から二四日	「兵神部下」	三一九（*）
九月二七日から一〇月一日	宇治山田地方	三一九（*）
一〇月一六・一七日	熊本	三二〇（*）
一二月九日から一八日	群馬県	三二五（*）
大正五年		
三月三〇日から四月一八日	長野・新潟・福島・茨城県	一二二三
七月三一日から八月三日	静岡県	五三
八月一四日から三〇日	静岡県	五三
一〇月五日から一四日	長野・群馬県	五六
一二月五日から一四日	長野県	六〇一
大正六年		
三月一日から八日	埼玉県	六六
四月二六日から五月七日	北陸地方	七一三
五月一六日から六月七日	山陽・山陰地方	七六九
七月三日から一三日	愛知県	八〇
七月三一日から八月四日	東京都	八一
八月五日から一三日	神奈川県	八一二

九月二日から一〇月二日	北海道・東北地方	八二四
十一月二〇日から十二月二〇日	鳥取県	九〇四
十二月二三日から二五日	静岡県	九四
大正七年		
一月五日から一五日	長野県	九七八
二月一日から七日	大阪府	一〇五七
二月二日から一五日	兵庫県	一〇七
二月一六日から五月一三日	山陽・九州地方	一〇八二六
七月五日から九日	埼玉・茨城・栃木県	一二八
七月二〇日から二四日	大阪府	一二九三〇
七月二六日から八月一二日	大阪府	一三〇一五
八月一五から二一日	大阪府	一三四
八月二二日から九月一日	鳥取県	一三五一六
九月一五日から一〇月一〇日	九州北部・山陰地方	一三六四二
十一月一日から一六日	愛知・岐阜・三重県	一四三二五
十一月一八日から二二日	大阪府	一四五六
十一月二九日から十二月一〇日	山陰地方	一四六七
大正八年		
一月二日から八日	静岡・愛知・三重県	一五一三
一月一日から二四日	大阪府	一五九六〇
一月二九日から二月四日	大阪府	一六一
二月六日から三月二七日	香川県・徳島県	一六一一七

\*「日記1」

この表にある訪問地からも明らかなように、廣池は、この間に北海道から九州まで日本全国をめぐる講演活動を行っていたことがわかる。

講演に際して廣池は、「講演中、助け一条の心のほかなきこと」（『日記2』一八ページ）と「人に助かってもらいたいという心で日目を歩む」（『天理教事典』四九〇ページ）ことを誓いながら、講演活動に心血を注いだのである。

講演は次第に数を増し、出張も長期化していった。そのようなか、大正七年二月二六日に、一月から六月までの半年間のスケジュールを広島県の鷺島で確認し、「かくのごとく、旅から旅へかけての大旅行は、真に借物の理を心に納め、因縁を自覚して、おちついて居らねば出来ぬことなり。人生は一大逆旅といえ、かくのごとく実地に旅行して、一日一夜足を伸ばす日なきを感謝し得るようになりしは、真に神様の御かげなりや」（『日記2』一〇九ページ）と、感謝の言葉を記している。

このときの大正七年二月二日から五月一三日の三か月間にわたる山陽・九州地方の講演旅行では、廣池は、合計「八万人以上」（『日記2』一二六ページ）の聴衆に向かって講演を行ったことがわかっている。五月八日には、すでに体に疲労が蓄積していたのである。廣池は、「さて小生講演の件に付き、かねて我が因縁果たしのため、我が身を忘れて、多数の聴衆にご満足を与えたと存じ、自分の健康程度以上の努力をさせていただきおり候」と講演活動を振り返り、「今回九州にて咽喉気管におさわりをいただき候間、色色さんげ仕り深く反省致し候え

ば、これまでの所もとより、大正元年の大病にて死去せしもの

図 出講表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
大4 / 5																															
6																															
7																															
8																															
9																															
10																															
11																															
12																															
大5 / 1																															
2																															
3																															
4																															
5																															
6																															
7																															
8																															
9																															
10																															
11																															
12																															
大6 / 1																															
2																															
3																															
4																															
5																															
6																															
7																															
8																															
9																															
10																															
11																															
12																															
大7 / 1																															
2																															
3																															
4																															
5																															
6																															
7																															
8																															
9																															
10																															
11																															
12																															
大8 / 1																															
2																															
3																															

\*黒い部分は出講中であることを示す。



と思ひ定めてのご恩報じの心遣い、世界助けの心遣いではありませんたれど、その内に多少我慢も混じり候事を発見つかまつり候間」と反省し、数千人規模の大講演会を、せいぜい二・三百人以内の規模に縮小し、「座談にておよそ一時間乃至二時間位お話しし上ぐべき候」との希望を述べている（#）。過密なスケジュールで、大規模な講演を重ね、「咽喉気管」はずでに持ちこたえられなくなっていたのである。

#### 講演旅行中のエピソード

講演旅行中、廣池は、講演を終えた後、宿所においても人心救済を手掛けていたことがわかる。大正六年五月二六日の『日記』に、「阿武郡佐々並吉山喜一」著者注、嘉市」、しきしま泊」（『日記2』七八ページ）と直筆で記されている記事に関するエピソードを、取り上げておきたい。

\*

「私「吉山嘉市」が博士にはじめて会ったのは大正六年で、先生が山口で講演されたときである。今はないが当時山口座という劇場があった。そこで講演をされた。私はその講演は聞かなかったが、この時の講演者は本部の山中彦七、土佐敏一、廣池博士の三名であった。この三人が次の講演会場である萩に行かれるのに、博士は車がきらいであったから二人引きの人力で行かれた。この時博士の希望が「途中佐々並で一泊したいが旅

館は好かんので教会はないか」ということであった。教会はないが私（吉山氏）が布教所を設けているので……そこへ泊めてくれぬかということであるのでお泊りいただく事となった。そのころ私の家は、下が八畳と四畳半で、八畳の間に神様をお祭りし、二階は六畳で床の間がついていた。先生にはその二階の六畳の間に休んでいた。山口県阿武郡旭村佐々並字板橋というところである。今はお泊りになった家はないが、その家は別のところへ移して建ててある。このお泊りになった日に、お話をしたいからということであったので村の有志の人を集めた。博士から村役場へ一筆書いてもらって村長や吏員、それに学校の教員や駐在の巡査など全部で三、「四〇名集まった。博士はこの時一時間半ぐらいお話し下された。集まった人も大変よろこんだ。その時のお話で私の頭に残っていることは「正義とか中庸とかいうものはわかり易く言えば一円のお金を五〇銭ずつ分けて取るということが中庸であり正義である。ところが、とかく人間というものは棒ほど願っても針ほど叶うというように、不平を起こしては正義も中庸も生まれぬ。どうしても犠牲が必要である。五〇銭のところは、六〇銭も七〇銭も譲るといふところに基本を置いて世の中を渡ってゆく、そこにはじめて正しい中庸、正義が行われる……」とおっしゃった。晩にはベニコウといって赤い膏薬を肩へ擦りこまれた。私に擦り込んでくれとおっしゃるので肩へ擦り込みました。つまり肩が



凝ってしかたがないのである。そこで、「先生、こんなうるさいことをしないで済むようにおいがけをただかれたらどうですか。先生は本部に居られるのだし、本部には沢山先生がおられるのですから……」と言ったら、「それぢや、吉山さん。」「本部の先生に話してみるとお前は高慢が強い、わしが、という我が強い、それを取れば肩の凝りが取れる。」「(#)」と行って下さるのだが、ところがそれが私はどうしても取れんのだ」とおっしゃった。」(#)

\*

このエピソードから、廣池が、講演に次ぐ講演を重ねながら、人心開発救済と自らの心の立てかえに努力している様子を垣間見ることができる。

#### 「モラルサイエンス」という語の初出

学問研究を「三年中止」して講演と人心救済に集中している間に、モラルサイエンスの構想が徐々に廣池の心の中で明確化してきた。大正五年六月二二日の『日記』に収録された、「一枚刷り」の「(法学博士広池千九郎氏の講話の一節)」という記事(『日記2』三七四―四一ページ)からは、この時期におけるモラルサイエンス研究の進展ぶりを窺うことができる。また、大正七年六月二七日の『日記』に記された、「モラル・サイエンスと国民道徳」に関する「高師」(高等師範)(『日記2』二二七ページ)で

の講演は、更に内容が充実してきたことがわかる。

ここで、「モラルサイエンス」という言葉の初出時期を確認しておくことにしたい。

大正六年二月一五日、浅草蔵前東京高等工業学校講堂で「工場主の利益の保護と職工の幸福獲得の方法とに就いて」と題する講演を行っているが、廣池は「サイエンス・オブ・モラル」という言葉を使っている(#)。これは「道徳の科学」という意味であり、「モラルサイエンス」に近い言葉ではあるが、まだそのものずばりというわけではない。

その九か月後の大正六年一月二一日から二一月一五日にかけて行われた、鳥取県下の地方改良講演会では、表題に「エシックスとモラル・サイエンス」という言葉が現れている(#)。これが、「モラル・サイエンス」という言葉が使われた最初の記録であると思われる。

更にまた、大正七年二月五日、大阪府南区教育会で「国体論」と題して行われた講演では、いっそう明確に、「(八) 道徳に合するものは、何故に科学的なるか、今日までは此の事を説明するの機会なかりしなり。然るに近時アンソロジー人類学、社会学ソシオロジー(Sociology) 並に法制史、政治学等の発達に伴い、人類の文化は道徳にある事を発見せり。(九) 是に於てか、倫理学エシックスの外、新たに道徳科学エチカルサイエンスの現出を促す事となるに至り、前記諸科学の暗サセツション示を基礎として、予は数年前より之が研究に従事せり」

(#)と述べている。これが「道徳科学」を「モラルサイエンス」と表現した最初の記録であり、この時点ですでに数年前から「モラルサイエンス」の研究を行ってきたということであるので、当初は「モラルサイエンス」という名称なしに研究がなされていたことが、ここで確認できたことになる。

ここにある「モラル・サイエンス」と「モラルサイエンス」、あるいは、「モラル・サイエンス」と「モラルサイエンス」と、いろいろな表記が見られるが、「・」や「ー」の有無にかかわらず、すべて同一と考えてよいと思われる。

#### 外国書の購入状況

廣池が、自分が取り組んでいる研究をモラルサイエンスと表現したことの背景に、外国書の影響があるのではないだろうか。廣池は外国書を東京日本橋の「丸善株式会社書籍部」を通して購入していたので、丸善から廣池に送られた書簡を手がかりに、倫理道徳関係の外国書の購入状況を調べてみた。廣池が何年間かけて購入した外国書の数は非常に多いので、ここではモラルサイエンスと直接関係すると思われるいくつかの基本的書籍、つまり、後に、『論文』の第一章第二項「従来欧米において道徳実行の効果を科学的に研究せんとせし学者の計画」で取り上げられた書籍に注目して、調べてみることにする。

大正六年一月一七日の廣池宛て丸善書簡で、「I. Sidgwick,

Outlines of the History of Ethics; 1. Bentham, Theory of Legislation; 1. Stephen, The Science of Ethics」は品切れと通知されているが、同年十二月一五日の丸善書簡にある「計算書」には、ベンサムの本とステューヴンの本は、同年十一月一日に廣池の元に発送されたこと、また、シジウィックの本は、数年遅れて、大正一〇年六月二七日の「請求書」に、大正九年二月二八日に発送されたことが記されている(#)。これにより、廣池がモラルサイエンスという語を使い始めた頃に、欧米のモラルサイエンス関係の図書を入手していたことが確認された。以下の書籍の購入は少し先の事になるが、ここにまとめて取り上げておこう。「Alexander, Samuel, - Moral Order and Progress」は、大正九年十二月一七日に廣池の元に発送され、「Gore, - New Scientific System of Morality」は、大正一〇年一月二九日に発送され、「14. Mill, J. S., - Utilitarianism」は、大正一〇年一月一六日の丸善書簡で廣池が注文したことがわかっている(#)。

これでモラルサイエンスは、大正五年の「学文的研究は三年中止」とした中止対象には含まれていなかったことがわかった。なぜなら、廣池は、講演と人心救済に邁進しながら、外国書を購入してモラルサイエンスの研究を推進していたからである。

## (二) 研究の進展と周囲の無理解に悩んだ時期

— 大正八年から大正一二年

廣池が五三歳から五七歳の時期である。この時期、モラルサイエンス研究はさらに進展し、廣池の心の中では体系化の目処が付いていたと思われる。廣池は、モラルサイエンス研究に対する周囲の誤解や無理解に苦しむが、その苦しみを試練と受け止め、最高道徳的反省と自らの人格向上の努力を通して、苦難を乗り越えようとしている。廣池は、この時期、いよいよモラルサイエンスの執筆に踏み出していくことになる。

## 本島滞在とモラルサイエンス研究の本格化

講演活動で、身体が疲労困憊していた廣池に手を差し伸べたのは、本島支教会の片山好造会長であった。

『日記』には、次のように記されている。

大正八年

二月二七日

「〔香川県〕<sup>なかたど</sup>仲多度郡本島村、<sup>ほんじま</sup>本島支教会に渡る。」〔日記

2〕一六五ページ)

二月二八日

「本島に渡る。」〔『日記2』一六七ページ)

廣池は、大正八年から同一三年の間、原則的に年二回、本島支教会に滞在し、静養しつつモラルサイエンスの研究に取り組み、その研究成果をもって、本島支教会傘下の布教師の講習会を手掛けた。講習会では筆記録がつくられている。

廣池は、大正八年四月二八日に、「年内にモラルサイエンスの内より、闊の御教理を作りて、一月頃までに御本部に献上」〔『日記2』一七七ページ)と神に誓いを立て、また、大正一年一月二九日には、「◎決定／(一)大正十四年までに、病の本の材料とか因縁とかいふ風に、天啓と学文上の訳文その他材料をならべて本部に提出す」〔『日記3』三五ページ)と記している。これらの記事は、教理研究とモラルサイエンス研究の表裏一体的関係を示唆する記述であると考えられる。

大正八年五月一日の『日記』には、「宮本圭三氏の謝義評定」〔『日記2』二二九ページ)といった記事がある。謝儀<sup>儀</sup>というのは、廣池が外国書を読んで抽出した必要箇所の日本語訳作成に対する謝礼のことである。大正九年七月二〇日には、「訳は一人増すこと」とあり、外国書による研究が進展している様子が窺える。廣池は、このようにして、欧米の学問的動向を踏まえながら、最新知識の集積を推し進めていたのである。

モラルサイエンス研究は、教理研究だけでなく、さまざまな現実の社会的問題に対しても一定の解決策を示し得るレベルにまで展開してきた。例えば、廣池が当時熱心に取り組んでいた

労働問題の道徳的解決に対しても、「労働問題とモラルサイエンス」といった論文を執筆し、『斯道』に四回連続（第五六号「大正八年五月号」、第五七号「大正八年六月号」、第五八号「大正八年七月号」、第五九号「大正八年八月号」）で発表している（#）。また、「華族会館」では、「日本に於ける各方面の首脳部及び準首脳部階級に向「けて」（『旧』紀要』第一号、一八ページ）、モラルサイエンス研究の成果に基づく講演会を五回開催している（それらは、（一）大正八年五月二一日、（二）大正八年十一月二二・二三日、（三）大正一〇年十一月一三日、（四）大正一二年七月一〇日、（五）昭和二年六月一七日）。後年、廣池は、この華族会館での講演を社会教育と位置づけ、一連のリストの最初に、大正八年五月二一日の講演会を置いている（『旧』紀要』第一号、一八ページ）。また、これも後年の記事であるが、大正一一年は「モラロジー教育の始」（#）と記していることも付言しておこう。更に、廣池は、大正一一年の四月七日から六月二〇日の間、朝鮮を訪問し、各地で講演を行い、四月一三日には朝鮮総督府で斎藤実総督に面会している。四月二六日の諸岡長藏宛書簡において廣池は、この朝鮮訪問の目的の一つは「モラル・サイエンスの力だめし」（#）であったと述べている。この表現は、モラルサイエンスの人心開発救済力の程度を实地に試してみるということで、モラルサイエンスに対する廣池の自信と共に、その客観的評価を得てみたいという気持ちがある。

窺えて大変興味深い。

これらの活動から、この時期における廣池のモラルサイエンス研究の充実ぶり、それに基づく廣池の全方位的な社会的活動の様子を窺うことができるであろう。

#### モラルサイエンスの執筆計画

大正九年に廣池は、「大正十年よりモラルサイエンスに執筆のこと」（『日記2』二六三ページ）と執筆開始を計画し、大正一一年には、これまでの材料集めだけでなく「少少ずつまとめ」（#）ることにし、「大正十五年中に完成」（『日記3』三五ページ）させるとの見通しを述べた。

後年の記事によると、「大正十一年には必要なる英、独、仏其他の外国書も殆んど備はり其大著述の内容の組織も既に一通り出来て目録体の原稿が出来上がり更に内外の書籍より本書に引用せむとする項目には一々其書籍の欄外に付箋を施して引用の便宜に供する迄に進「んだ」（『旧』紀要』第一号、三ページ）とされている。

#### 人心開発救済を通して自己の精神向上の必要性を痛感

この間、廣池は、一方において、天理教の講演会や国民道徳講演会を通じて、また、労働問題の道徳的解決に尽力する中で、多くの人心開発救済を手掛けると共に、他方において、皇

室に最高道徳を入れるとの構想のもと、国家の指導者に対する開発に乗り出している。

大正一一年七月二四日には、「治定／＼……今年中に皇室に最高道徳を入れ奉ること。このためには本部の御考え通り、本部職員にあらざうということに致すこと。／＼……（6）なお皇室に対し奉りては、天祖の最高道徳にて御魂を救われたまうように進講させていただくつもりなり。而して最高道徳なるものは、天の理、ナチュラルロー即ち神の御心なり、世界聖人の行なうところと説く」（『日記3』二二―二三ページ）と記している。

皇室開発に携わる時には、「本部の御考え通り、本部職員にあらざうということに致すこと」とあるが、これはどのように理解したらよいのだろうか。皇室開発に当たって、廣池が進講の仕方と最高道徳の説き方をこのように決めていたのだとすれば、これは天理教の立場を踏まえたものではないとして、やるなら本部職員ではなく廣池個人の立場で行うようにせよ、という事になったのであるうか。もしそういうことであれば、理解できなくもない。しかし、この順序が逆であったとしたらどうであろうか。つまり、皇室開発に乗り出すのであれば、「本部職員にあらざう」ということにせよと言われて、このような説き方を考え出したのであるとすれば、なぜ、「本部職員にあらざう」ということにしなければならなかったのだろうか、という

疑問が残る。この問題は、後に取り上げるが、廣池が「伝統」を導入し、「宗教の伝統」を潜在化する際に指摘している宗教の特性と関係しているのではないかと、私は考えている。更に、興味深いことに、この皇室開発の計画は、「宗教の伝統」を潜在化し、『論文』を完成・出版した翌年の昭和四年に、「進講」という形ではないが、「献本」という形で実現されることになったのである。

大正一一年八月二二日には、同月一九日から二五日迄予定されている松方正義侯爵訪問を目前にして、廣池は、「松方老侯始め上流を感化して、最高道徳を雲上うんじょうに入れ奉るにつきては、自分の精神の理を移さねばならず。さすればその自分の精神がどのくらいに偉大なるか。偉大でなくてこれを移すも、何で上うへつ方を感化し奉り得んや」（『日記3』二八ページ）と、最高道徳の伝達者である自分自身の精神向上の必要性を痛感している。「上流」開発に着手して、改めて、これまでも大いに悩み努力してきた最高道徳的真理の伝達者としての資格問題に、直面することになったのである。

#### 無理解、誤解の中、感謝の心で研究を推進

次第に研究が進んできたモラルサイエンスに対する天理教本部の受け止め方はどうであったのだろうか。大正一〇年六月二八日の諸岡長蔵宛書簡の中で、廣池は、「一昨日も人物養成の



必要を、松村幹事殿小生へ力説致しおられ候。しかしながら教理の科学的研究の大大の大必要なる事と、研究に多大の資金と労力と時間のかかりおる事は、何人も認めて下さらぬのには、残念の思いなきしもあらざれど、ここがすなわち貴台と小生との神様に対して受け取っていただく所なるかと思つて、喜ばしていただいております。陰徳とおぼしめし、貴台も深くお喜びくだされたく、遥かに祈り上げ申し候」(＃)とあり、天理教本部の松村幹事は、「教理の科学的研究」、つまり、モラルサイエンスの必要性は認めてくれなかつたのである。廣池は、このようなモラルサイエンスに対する本部側の無理解を、「神様に対して受け取っていただく所」と意義づけて、喜んで受け止めようとしている。

このような無理解の中、廣池は、大正一一年八月三日に、「すべて馬鹿にせられて、これをタンノウする心使いありてこそ、今世界中、第一の最高道徳者なれ。これにてモラルサイエンスそのものに偉大なる世界助けの生命を生ずることと思はる」(『日記3』二五ページ)と記している。廣池にとつて目下の重大問題は、モラルサイエンスに世界の人心を開発救済する生命力を持たせることであり、そのためには慈悲寛大自己反省の精神で最高道徳的にこの事態に対処していく以外道はないと覚悟を新たにしたのである。

ここには重要な概念がいくつか出ているので、二つ取り上げ

ておくことにしたい。第一は、「タンノウ」である。これは天理教の用語で、たとえ期待した結果が出なくても、また、苦難の状況に立ち至つたとしても、その状況に不平不満の感情を抱くことなく、自分の置かれている状況を感謝して受け容れることを意味している(『廣池千九郎日記 用語解説』一四〇ページ。以下『用語解説』と記す)。第二は、「生命」という言葉である。「モラルサイエンスそのものに偉大なる世界助けの生命を生ずる」とは、苦難の状況を「タンノウ」する中から切り拓くことで、モラルサイエンスそのものに人心を救済しうる生命力が生じてくるということであり、また、「タンノウの生命あり」とは、タンノウを通して獲得された人心を救済しうる実力、つまり、生命力が宿つているということであろうと思われる。

### (三) 執筆開始と「伝統」導入の誓いに至る時期

—大正一二年から大正一四年五月一二日

廣池が、五七歳から五九歳の時期である。廣池は、天理教本部から「神恵講」の設置許可を得、自らモラルサイエンスの研究成果を教育的に用い、神恵講の信徒一人一人の人心開発救済を手掛ける決断を下したのである。また、この頃に中田中、鈴木利三郎という二人の助手を獲得し、実践と研究の両方を手掛けながら、畑毛温泉に滞在して集中的にモラルサイエンスの執筆を推進し、「伝統」導入を神に誓うことになった時期である。



## 「神恵講」の設置と二人の助手の獲得

大正一二年二月八日には、「今、予は外部からは天理教に買われたかと誤解せられ、内部からは不用のものの一部のものには誤解せられ、而して予の努力と苦心とは、十年一日のごとくかくの次第なり。……／＼自利のために遊びつつ書いたモラルサイエンスが何になるか。苦しき中を紳士の生活にタンノウして書けばこそ、その中にタンノウの生命ありと考えて、昨半年間は働きしも、ついに脳に禍わざわいせるゆえに、今回は布教の方針（大正元年十二月六日の夜のサンゲに一致す）を採ることとせり」（『日記3』四七―四八ページ）と記している。

ここに「今回は布教の方針……を採る」とあるように、廣池は、「みずから汗して、みずから生み出す決意」（『経路』一一五ページ）を固め、大正一二年四月一五日に天理教本部より本部直轄「神恵講」の設置許可を得たのである。またこの頃、廣池は、中田中、鈴木利三郎という二人の助手を獲得し、「講習会方式をあと回しにして、一人一人への、運命の改善という救済方式への転換」（『経路』一二四ページ）を行った。廣池は、神恵講の信徒を対象に、モラルサイエンスによる教育と人心救済を、自ら苦勞して、実地に行うことにしたのである。

## 「講話要領」に見るモラルサイエンスの内容

大正一二年七月一〇日に、廣池は華族会館において、大木遠

吉伯爵主催で「主として政界の巨頭、親任級及び勅任級の官吏を招待」して講演を行った（『旧』紀要』第一号、一八ページ）。華族会館での講演は、モラルサイエンスの研究発表の場であり、また、この時は廣池が畑毛温泉で執筆を開始する一月前ということもあり、この時の「講話要領」は、その当時廣池が構想していたモラルサイエンスの内容を窺い知ることができる貴重な資料であるので、多少長くなるが主要項目を示しておくことにしたい。

\*

第一 十九世紀初頭の欧州の思想界及び社会の状態

第二 サン・シモン (Saint Simon, 一七六〇―一八二五) の

計画

第三 オーギュスト・コムト (August Comte, 一七九八―

八五七) の研究

第四 コムトの研究の結果今や世界を風靡するに至りたれ

ど……これ丈には未だ現代を救済キユアすること能はず

第五 二十世紀の状態は政治革命ポチカルレボリユーションより社会革命ソシヤルレボリユーション

に進む

第六 偉大なる宗教の力を必要とすれど宗教の弊は普遍的

ならざるが故に矢張りコムトの計画の如く科学の力にて社会組織の原理と個人の幸福及び団体の文化の原因結果とを明らかにして教育の方面より個人を開発し以

て人心の改造及び社会の統制を図らざるべからず従つて次に政治法律外交軍事経済産業其他社会万般の統制機関を此の基礎の上に置かねばならぬ

第七 モラルサイエンス (Moral Science) の必要起る

第八 モラルサイエンスという術語の従来に於ける用法

第九 余は神宮奉職十九ヶ年間法律の外道徳宗教及国体の研究に従事し大正三年以降専らモラルサイエンスの研究に従事す

第十 モラルサイエンス研究の原因及び目的

(一) 政治法律及軍隊の如きは勿論当面の必要はあれど人類の幸福を標準とする所の社会統制機関としては寧ろ其末節にして道徳はその根本義なる事を発見す

(二) 宗教の教訓及教育に於ける徳育に權威なき理由を發見す

(三) ここに於て前述の社会学を今一層精確に研究することと其の実行を精神的にすることの外更に其の社会学の上に今一つ最高道徳の科学的研究の必要なる事を發見して其の研究を思い立つ

(四) 欧米には最高道徳の実行者はなきに非ざれどもその結果存在せざるが故に最高道徳の研究は学者これに思ひ付かず

第十一 世界における最高道徳の実行者

第十二 我が万世一系の皇室の御運命の原因

第十三 最高道徳發生の根本原理

第十四 最高道徳実行の根本精神

第十五 最高道徳究極の実行要目

第十六 最高道徳実行の効果

第十七 軍国主義、資本主義の不完全と社会主義の伝播する理由

第十八 根本義を修めざれば我が国と雖も早晚社会革命を免るるを得ず

第十九 学校教育の改革、貴族の教育、陸海軍人の教育、・・・以上尽く我が国体の真義たる最高道徳によらざれば全く効力なし。

第二十 しかし乍ら先ず根本義の根本義ハ上流社会の御方が翻然反省せられ天祖の御聖徳即ち最高道徳の実行を為すにあり

第二十一 以上唯これ最高道徳のアウトラインに過ぎず。されば真に永久の幸福を享け且つ一代の人心を指導して隠徳を積まんと欲する御方は更に深く最高道徳の實質を究め躬親ら之を実行するを要す (#)

\*

第一から第六は、コムトの社会学や欧州の政治思想等を踏まえて、道徳の科学的研究と教育の必要性を述べ、第七から第十

でモラルサイエンスの必要性、研究沿革、そして、研究を通して発見した成果を示し、第十一から第二十で最高道徳の内容から実行の必要性までを語り、第二十一で最高道徳実行の重要性を述べて結論としている。

この「講話要領」は、廣池が、大正一二年一〇月二十九日に、「上流にぼつぼつモラルサイエンスを説くこと（宗教をも高潮する）」、「中流以下には天理教を本として説明すること」と開発方針を述べていたことを、併せて見る必要があると思われる（『日記3』三五ページ）。

#### 畑毛でモラルサイエンスの執筆を開始

廣池は大正一二年八月一四日から、伊豆の畑毛温泉に滞在してモラルサイエンスの執筆に取り組んだ。これは、同年八月二日に阪谷芳郎男爵からの見舞状を受け取り、「ますます心を研ひぎ、徳を修め、神意に合して大事業の速成を図らしていただくこと」（『日記3』八五ページ）と誓いを立てたことが重要な契機となった。

同年九月一日の関東大震災を経た一〇月二日には、「いよいよ文章となりかかり」（#）とあるように、執筆が順調に進展している様子が窺える。翌一月一四日には、諸岡長藏宛書簡で、「目下第十二章起草中に候。全部を三百頁に縮めてよくわかる様にとり考えに候が、誠に取捨に骨折れ申しお

候。最高道徳の説明だけが八・九十頁に相成り申し候かと存じ候。なる程とわかるだけには致さねば相成らず候」（#）と執筆上の苦勞を書き送っている。後年の記録では、この大正一二年に、モラルサイエンスの「第一巻の第一章、第二章、第五章及び第二巻の一部の原稿が出来「た」（『旧』紀要』第一号、三ページ）とされている。

#### 天理教教理研究を先に仕上げるよう依頼される

大正一三年二月一七日の諸岡長藏宛書簡で、「先日大祭の際、松村幹事殿に面会の節、モラル・サイエンスなど本教と間接的のものは、後に廻す様にとの御心のごとく見え、教理をまづ仕上げてはとの御事につき、直ちにお受け申し上げ候」（#）と伝えた。廣池は、漸く軌道に乗ってきたモラルサイエンスの執筆を一時中断して、明治四五年一月四日以来一二年四ヵ月間取り組んできた天理教教理の研究を仕上げ、同年五月五日に「御本部に献上」（『日記3』一〇六ページ）している。同年八月一日には、本部の撰行者山沢為造から廣池へ、先に献上した教理書に付箋が付けられたものが送付され、修正を求められている。松村幹事が付箋した部分では、国体にかかわる記述の修正が求められる、廣池は本部に出かけ、松村幹事と何回か「押し合

い」（#）、つまり、議論を行っている。

この時点までに、廣池と天理教本部との関係で、明確化して

きたことを指摘しておきたい。廣池は、大正四年四月一日に、「1. 「明治」三十七年、宗教を信ぜんとして止めしこと。／(1) 国体、(2) 科学、(3) 生命／三要素を要す。／2. 四十二年、逢着す」(『日記1』二九七ページ)と記し、天理教にはこれら三つの要素が備わっていることを自ら確認した上で入信し、大正元年の大患を経て、同二年一月二五日に天理教本部に移り、初代管長から教理研究者として特別な役割を託されたのであった。しかし、大正四年に身分的変更を経たことで、大正一三年時点の天理教本部は、教理研究者としての廣池が手掛ける教理の科学的研究であるモラルサイエンスも、教理研究における皇室中心の「国体」解釈も、受け入れない姿勢を明らかにしてきたのである。

#### モラルサイエンスの執筆再開

教理書を仕上げた後、廣池は直ちにモラルサイエンス研究に立ち戻り、大正一三年七月二日の諸岡長藏宛書簡で、「十月までに骨組だけはおまわりたく存じおり候。それでも今の所和文だけが、来年春までかかりそうに候。簡単・明瞭・平易を旨と致し、その間に真理徹底を期しおり候えども、紙数五百頁にはなりそうに候」(＃)と伝えている。大正一二年一月一四日に、「三百頁」と言っていたのが、八か月後には「五百頁」となり、執筆が進むにつれ大部化していることがわかる。大正

一三年九月一〇日には、「明年今ごろには日本文だけは全部脱稿つかまつるべき予定にこれ有り候。思うたよりはますます進んで、ますますむつかしく且つ太く相成り、実に予想外の困難これ有り候ども、幸にして何もかもおおよそ相分り申しおり候」と述べるほどの目覚ましい進展を遂げ、「出版」の話もそろそろ出てくるようになった(＃)。

#### 第一巻の原稿訂正と、謄写版および英訳の計画

大正一四年二月一〇日の諸岡長藏宛書簡で廣池は、「当方は第一巻漸く出来、ただ今訂正を重ねおり候。いよいよ進んでいよいよむつかしく候えども、神様の御守護と貴台の御後援とによりて日日進捗、近く謄写版に致すまでに相成り候間、御安心下されたく候。／……殊に青年等は夜間十二時まで努力致しおり候。日本古典の読み方とその意味とを、英文に訳する方法を考究つかまつり、目下その原稿作製中に候。それはとても筆紙に尽されぬ難事業にこれ有り候。全く人力にては出来申さず、神様のお力のままと信じおり候。／日本民族の真の道徳的精神が、科学的に欧米に紹介され候わば、日本人の信用今より数倍に上り申すべく、ありがたき事に候」(＃)と、第一巻は出来たが訂正を加えていること、近く謄写版を作成すること、英訳のための原稿をつくっていること、英訳をつくることの意味などを、伝えている。

## 「伝統」導入の御願ひ

畑毛に滞在していた大正一四年五月一二日に、廣池は、「神様に御願ひ。／＼（一）モラル〔サイエンス〕に伝統のこと、何らかの形式にて入れます」（『日記3』一三〇ページ）という誓いを『日記』に書き記した。この記事は、五月七日から始まり、八月二三日まで続いた「不調」の中で記されたこと、また、これが『日記』における「伝統」の初出箇所だということに、注目しておきたい。廣池は、その間の不調を「御手入れ」（『日記3』一三七ページ）と捉えた。「御手入れ」については、すぐ後で取り上げることになっている。ここに記された「伝統」とは、廣池のモラルサイエンスの眼目であり、「伝統」導入の成功なしにはモラルサイエンスは決して完成しなかつたであろうと私は考えている。

## 二 モラルサイエンス研究の後半期

—大正一四年五月一二日から昭和四年

後半期におけるモラルサイエンス研究の特色は、「伝統」概念を導入し、「伝統の原理」を確定し、モラルサイエンスを、人類的地平に立つ、世界人心の開發救済をなし得る実力を備えた学体系的として完成しようとする努力し、それを成し遂げたことにある。

この後半期は、更に四つの特徴的な時期に分けられる。それは、（四）「伝統」導入と第十四章の組み立てを完成した、大正一四年五月一二日から大正一五年の時期、（五）謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の印刷に着手し完成を迎える、大正一五年から昭和二年八月一七日の時期、（六）謄写版『ザ・モラル・サイエンス』に修正、加筆、組換えを行って『論文』を完成・出版した、昭和二年八月一七日から昭和四年の時期、（七）『論文』出版後に行った教導職辞職・神恵講返納と天皇陛下に『論文』を献上した、昭和四年一月から同年三月の時期である。以下、それぞれの時期について、詳しく見ていくことにしよう。

## （四）「伝統」導入と第十四章の組み立てを完成した時期

—大正一四年五月一二日から大正一五年

廣池が五九歳から六〇歳の時期である。この時期、廣池は、モラルサイエンスに「伝統」を書き入れ、第十四章の組み立てを完成している。廣池は、大正一四年六月二七日に畑毛温泉を離れて下部温泉（山梨県）に移り、これ以降、全国各地の温泉をめぐる療養・研究の旅が始まったのである。

## 「伝統」導入の「御手入れ」

大正一四年五月七日から八月二三日まで続く不調を、廣池は



「御手入れ」と捉えたということは、すでに述べた。この「御手入れ」とは天理教の用語で、「人を救うために試練を与え、その試練を通して反省を促し、人生の正しい道を教え、救済へと導く」神の働きを意味する。具体的には、「病氣や困難は自己に対する深い反省を促す契機」であり、それらを神の「御手入れ」として感謝の心で受け止めることによって、救済へと導かれることになる、という考え方である（『用語解説』四二ページ）。

下部温泉では、大正一四年七月「十八日の朝より十九日夕までの御手入れは近年なき強き苦しみに付き、すべての事情みな決定致したり」（『日記3』一四八ページ）と記し、増富温泉（山梨県）では、七月二十七日に「今一段聖者とならずば、モラルサイエンスに生命なきこと」、「絶対信仰をなして撓たぶまず。必ずモラルサイエンスに極度の生命を与うること」と記し（『日記3』一五〇―一五一ページ）、同日に中田中に宛てた書簡には、「今日までの心使いでは、まだモラルサイエンスに生命なき事を御知らせ下されたる事」（#）と表現した。この間の「御手入れ」は「伝統」導入の御手入れであることを踏まえるなら、廣池は、「伝統」導入の御手入れをいかなる心的態度で受け止めるかで、執筆中のモラルサイエンスに生命が宿るか否かが決まると考えており、ここで明確に、自分自身が聖者となる覚悟を固めたものと思われる。

大正一四年八月二十六日の諸岡長蔵宛書簡では、「今回のお手入れは容易の事と思われず、実に小生一代最後の事を決行するのみならず、各位の誠意を貫徹させて、全世界の人類救済の根本義を確立せねばならぬ次第につき、形のモラル・サイエンスは今や完成に近づき候も、心のモラル・サイエンス果してそれに副うや否や、この点に思い及び深き反省をつかまつりおり候。／一、本部に対する諸件。／二、内内信仰の件。／三、モラル発表の方法及び将来のいろいろ。／四、モラルの内容と教会の弊害との調和点。／右につき、一・二は大略解決、三・四は目下なお考案中にこれ有り候」（#）と述べている。「小生一代最後の事を決行する」、「全世界の人類救済の根本義を確立せねばならぬ」、「内々信仰の件」、「一・二は大略解決」等を併せて考察するなら、この頃に、宗教の信仰を潜在化するという考えが明確化してきたものと思われる。

里山辺温泉（長野県）では、大正一四年一〇月一四日の諸岡長蔵宛書簡で、「当夏のお手入れにて、小生いろいろ前途の方針相定め候上、研究も大いに進捗致し、十二月までには大略上巻だけは脱稿致すべき予定に御座候」（#）と述べ、十一月一日には、「お蔭様にて日日進捗、十二月十五日ごろ第一巻は大略（一章位は残るかも知れねど）仕上げて、上京の考えに候。さしも困難の仏教の帰着点もつきとめ、いよいよ古聖人方の偉大と、現代の各宗教家との懸隔のはなはだしきに驚きおり



候。日日夜夜、古聖人の大精神に刺激せられて、助けられおり申し候。／＼……信仰の標準となるべきもの、一日も早く世に出したく願ひおる次第に候」(# )と、今回の「お手入れ」を経て、古聖人への共感を深めたことが伝えられている。

#### 「伝統」導入に伴うモラルサイエンスの再組織化

廣池は大正一四年一月二五日の中田中宛はがき(代筆)で、「博士の研究はソクラテス、キリスト、釈迦、孔子、日本における最高道徳の実行と、その結果などを科学的に証明するにあり。／＼その最高道徳の眼目は、慈悲寛大自己反省にあることと説明するがよい」(# )と、指示している。ここには、明確に、聖人を中心として組織されたモラルサイエンスと最高道徳の立場が打ち出されている。

この段階で、宗教の「伝統」は潜在化され、諸聖人等の最高道徳の「伝統」を顕在化し、モラルサイエンスは、「教理の科学的研究」から諸聖人の「最高道徳の実行と、その結果などを科学的に証明する」新科学へと、新たな展開を遂げつつあることが読み取れる。

大正一五年二月九日に吉奈温泉(静岡県)から中田中に宛てた書簡に、「十四章の組立てがすん「だ」」(# )ことが、「中田注」の付箋貼付に記されており、また同月二六日の書簡では、「仕事、第一巻だけは終了しました」(# )と伝えている。しか

し、後ほど判明するが、第十四章は、この後も修正や加筆が行われ、完成はまだまだ先のことになるのである。

(五) 謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の印刷に着手し完成を迎える時期

—大正一五年から昭和二年八月一七日

廣池が六〇歳から六一歳の時期である。この時期に、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の印刷が開始され完成を迎えることとなる。また、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の英訳事業がスタートし、「伝統」導入に関しては、「潜在的伝統」と「顕在的伝統」の区別が確定され、「モラロジー」という学術用語がつくられた時期である。

謄写版印刷に着手し、いくつかの章が順次刷り上がる

モラルサイエンスの謄写版印刷は、伊豆の吉奈温泉に滞在していた大正一五年三月五日に着手し(『日記3』一六九ページ)、群馬県の新鹿沢温泉に滞在していた昭和二年八月一七日に終了した(『日記3』一八五ページ)。

謄写版印刷に取り掛かった直後の大正一五年四月四日に、廣池は、「只今モラル・サイエンス決定の時に付き、お道を生かすか殺すかの問題の決定時に付き、神様のお手入れなるかとも考えらる」(# )と記している。このときの不調は、四月一日

から七月一五日迄、約三ヵ月半、一進二退を繰り返しながら続いた。ここにある、「お道を生かすか殺すかの問題」とは、モラルサイエンスに、天理教の思想、考え方、用語等をはじめとする天理教的なるものを残すか否かという問題であり、いよいよこの問題に決着をつけなければならない時期に到達したということである。

謄写版で最初に完成した章は、第四章で、大正一五年四月七日のことであった。次は、第一章と第二章で四月二〇日、第六章は六月七日、第八章と第九章は七月二日、第十章は七月七日に完成というように、次々に完成（その他の章の完成日は調査中）したが、「伝統」を扱った第十四章は原稿が確定せず、第十四章の謄写版完成はずっと遅れることになる。

第十四章の原稿訂正と謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の完成

大正一五年六月一日に廣池は、中田中に、「十四章はまだまだ暇がかり申すべく候」(#)と伝え、同年九月四日に、「十四章およびあちこちと不完全なる所を完成し」[た]（『日記3』一七三ページ）と記し、同年十一月九日に諸岡長藏宛書簡で、「十二章・十四章、浩瀚こうかんの上に難点多く、思いのまま抄はか取らず候。今の予定は十分努力して、来年二月終わりまでに謄写版かかり申すべくと存じ候」(#)と予告し、同年一二月二三日に

は、「十四章の方いろいろ厄介の事起こり、目下は日日その方の訂正」(#)を行っていると伝えた。

年が明けた昭和二年二月二四日には、また、「十四章の再訂正」(#)を行っていたが、同年三月一四日に、廣池は、中田中宛書簡で「十四章の一項より六項まで西原の処にあり」(#)と伝えている。これにより謄写版の印刷作業が進行中であることが推察される。同年四月五日には、漸く、「十四章も謄写版約半分程進捗、二百五十枚にも相成り候。全部五百枚にも達し申すべく候」(#)と相当大部化してきている。同年五月二二日には、「第十四章謄写版も、おおよそ今五月中には完了つかまつるべく候」(#)と、完成の見通しがついたことを伝えていく。このとき、廣池は、「この章だけに費やせし日数五百日（一年半）以上と相成り候」(#)と困難を極めた様子を伝えていく。同年七月七日、第十四章の謄写版を受け取った諸岡長藏は礼状の中で、「今回御送り被下候十四章は、本書の決論「決論」とも可申か、深き興味を以て拜読罷在候」(#)と感想を述べている。

昭和二年八月一七日に「終了」(『日記3』一八五ページ)した謄写版『ザ・モラル・サイエンス』について、同年九月三日の諸岡長藏宛書簡で、廣池は、「謄写版、いよいよ形だけは完成つかまつり候。目録共二千五百枚に相成り申し候」(#)と伝えた。

ここに完成した謄写版が、即、『道徳科学の論文』になったのではない。廣池は、完成した謄写版に、更に加筆修正等を行い、『論文』へと仕上げていったのである。

#### モラルサイエンスの英訳開始

この時期に、モラルサイエンスの英訳がスタートした。大正一五年七月二日に、諸岡長蔵宛書簡で、「翻訳は今七月一日より着手のほすの所、今少少報酬の点にて、交渉未済の事これ有り、いずれ近日着手に及び申すべく候」(＃)と伝え、同年七月七日に、「翻訳の件、外国語学校教授に依頼につき、たびたび交渉の結果大略相まとなり、原稿はじめの方引き渡し、既に着手に及び候間お知らせ申し上げ候」(＃)と、モラルサイエンスの英訳がスタートしたことがわかる。翻訳者は大岩元三郎教授に決定した。

廣池は、英訳依頼に際し、「訳文の下こしらえ」(＃)をした原稿を翻訳者に渡している。これは、すでに大正一四年二月一日の諸岡長蔵宛書簡で、「日本古典の読み方とその意味とを、英文に訳する方法を考究つかまつり、目下その原稿作製中に候。それはとても筆紙に尽されぬ難事業にこれ有り候」(＃)と述べていたものだが、その他に、人名、地名、テクニカルターム等々の英語表記が書き込まれ、翻訳者は調べ物に時間を取られることなく、英文作成に集中できるようにとの配慮をもつ

てつくられたものであった。

廣池は、大正一五年八月二七日の鈴木利三郎宛はがきで、「第一章二八ページの一七行目の伝統は、元の Succession に致します。Tradition は誤りですから、この事を直ちに翻訳者にお話してください」(＃)と書き送ったように、「伝統」という語に込められた独自の意味が、英訳を通して明確化されてきている様子と共に、廣池が、英訳文を注意深くチェックしていた様子も窺い知ることができる。

英訳を通して、「伝統」の意味が更に検討されていく。昭和二年三月二〇日の鈴木利三郎から廣池千九郎宛書簡の「二伸」には、「尚傳統の訳語二付いて一寸大岩先生に御相談申し候処サクセション文にては余りたよりなき由申され且つ夫れにては系統を現はし得ぬ事を申され結局左の如く致さは其傳統の意味極めて明瞭に相成るべくと申され候。／＼Line of succession／右は「日本皇室は萬世一系」と申す時「萬世一系」に用ふる事あるとの由、されど更ニ其意味を拡張すれば本書に云ふ傳統の意をあらはす適語なるべしと申され候」(＃)と、「Succession」に「Line of」を加えるという大岩教授の提案が伝えられた。

このように、日本語ではわかっていたはずの「伝統」を、英語で表現しようとするとなかなか難しく、的確な英語表現を求めて検討が重ねられているが、この過程で、「伝統」それ自体

に対する理解も深まり、精緻化されていったのだと思われる。

### 「宗教の伝統」の潜在化

廣池は、昭和元年二月二十八日の鈴木利三郎宛書簡で、「伝統の順」を説明し、「1、国あり、2、父母ありて、3、宗教あり。／故に国が1、家の伝統が2、最高道德とか宗教の伝統は3」(#)と述べている。このような区分を踏まえるなら、大正一四年五月一二日の「モラル」<sup>【サイエンス】</sup>に伝統のこと、何らかの形式にて入れます」という記述における「伝統」は、どれに当たるのであろうか。「伝統」の初出時点では、まだこのような区分は存在していなかったということも考えられるが、私は、大正一五年四月四日の「治定」の中に、「余は自ら伝統と重んじて、天理教祖の人格を信仰す」(#)といった表現があることを考え併せて、「宗教の伝統」であったのではないかと考えている。この「宗教の伝統」をモラルサイエンスにどのように入導するかで、廣池はこの数年間、大いに心を砕き、苦心を重ねてきたのである。

ここで、「宗教の伝統」を潜在化させるに至った廣池の考え方を見ておくことにしよう。

\*

「諸伝統の内にて精神救済の伝統は、神(本体)と諸聖人との下に更に吾人に達するまでの伝統があるのです。こ

れすなわち宗教の伝統でありまして、これは聖人と吾人との中間に存する精神的救済の機関であります。」(#)

と、「精神救済の伝統」の中に、「宗教の伝統」と言うものがあること、また、それは「中間」的な「精神的救済の機関」であると述べている。そして次に、

「神(本体)と聖人とは人類の共通崇拜の目的物たる性質を有すれど、その下に起こった所の宗教は聖人の教えに就いて、あるいはその中の一部分を伝え、あるいはこれに多少の曲折を加えて伝え、各一の教義を有して主権を有する精神的王国を形成しておるがために、これは人類共通の性質を欠いておつて一部分的性質を有しておるのです。故に伝統の中に神とか・聖人とか、あるいは肉親の父母・祖先などは、多少その性質上には相違があるのです。」(#)

と、宗教は「神とか・聖人とか、あるいは肉親の父母・祖先など」と比べて、「人類共通の性質を欠いておつて一部分的性質を有しておる」とその特性を指摘している。

前に、大正一一年七月二四日の皇室開発の件で、「本部職員にあらず」ということにせよと言われたことを取り上げた際

に、このような対応は宗教の特性と関係しているのではないかと述べておいた。その宗教の特性とは、ここにある、宗教団体は「教義<sup>ドグマ</sup>を有して主権を有する精神的王国」を形成するという特性のことである。国家の中にあっても、精神的に国家を超える精神的王国を形成している宗教団体としては、「国家伝統」の下に位置づけられるような働きかけはあえてしないであろう、それゆえ、皇室開発に乗り出す必要はない、もし、やるのであれば「本部職員にあらざ」ということにせよ、ということになったのではないかと考え、宗教の特性と関係しているのではないかと述べておいたのである。

さて、廣池の議論に戻ろう。宗教の特性は、「人類共通の性質を欠いておって一部分的性質を有しておる」と指摘し、「宗教の伝統」は他の「伝統」と相違すると述べたが、それが重要性を持つ場合があるとして、更に次のように述べている。

「しかしながら万一真にその宗教が吾人の精神を生み改めたものであったならば、その恩沢は大なるものでありますから、たといいかなる事あるも、これを見捨てる事は最高道徳にて許されぬ事でありませぬ。」(＃)

そして、更に具体的に踏み込んで、

「しかしながら左の場合は真にやむを得ぬ事とも考えられます。／＼(一)自分が教会もしくは寺院より破門もしくは退去を命ぜられた場合。……／＼(二)教会もしくは寺院の廃絶もしくはは国法にて禁止せられたる場合。……／＼(三)自己の不平もしくは不利益のためと言う意味でなくして、広く世界の人心を救済するには現在自分の所属の教派・教会(寺院)に、このまま属しておつては不適當と認むる場合。」(＃)

と、三つの「真にやむを得ぬ」場合を挙げている。

廣池が直面していた状況は、(一)でも(二)でもなく、(三)の場合である。これについては、

「しかしながらこの場合にはただ単に口実のみではいけません。真に世界を助けたいと言う慈悲心の溢れたる余りに、我が身の利害を顧みるに暇なく、真の至誠心に出たるものであれば、やむを得ず旧伝統を見捨てても差し支えありませんが、万一左もなくては神の心に背く事になりまして、かえって自分の滅亡を来たす事になります。されば普通人の輕輕に断行すべきことではありません。」(＃)

と、「やむを得ず旧伝統を見捨て」ることになる場合があるが、簡単にやるようなことではないと、言葉を尽くして注意してい



る。

廣池は、このような熟考熟慮を経て、宗教団体を潜在的に扱うという決断を下したのである。

「純科学的で且つ教育的である所のモラル・サイエンスの最高道徳にてはその当然の結果としてこの宗教団体をば神（本体）及び聖人と吾人一般人類との中間機関として取り扱ひもつて全く言語・文章及び行動の上に表現する事は致さぬのであります。」（#）

\*

以上のような決定がなされなければ、第十四章は完成せず、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』も完成することはなかったであろう。

モラルサイエンスとは何かについて、「伝統」導入以前には、「教理の科学的研究」（#）とも、「天理の合理的説明に関する研究」（『日記3』一一五ページ）とも表現されていたが、大正一四年五月一二日に「伝統」導入の誓いを立て、「宗教の伝統」を潜在化する道を切り拓いたことで、モラルサイエンスは世界諸聖人等の教説と最高道徳を中心に組織された新科学へと変容を遂げることとなったのである。

「モラロジー」という語の初出

廣池は、大正一五年九月一五日の諸岡長藏宛書簡で、「お蔭様にてモラロジーの前途鞏固なる方針相立ち」（#）と述べているが、これがモラロジーという語の初出であると思われる。この語について廣池は、「第一章起草の際私が撰定した上に英語専門家たる市河三喜博士に御相談して決定したのです」（『旧』紀要』第一号、五ページ）と、確定のプロセスを述べている。

「モラル・サイエンス及びモラロジーの略説明」に見るモラルサイエンス研究の由来

昭和二年六月一八日に、廣池は「モラル・サイエンス及びモラロジーの略説明」（『回顧録』一二五―一四四ページ）と題する講演を東京下渋谷の報恩協会（プロデューティ・ソサイティ）で行っている。この講演で、廣池は、「モラル・サイエンスの研究を思い立てる動機」（『回顧録』一二七ページ）について詳しく話したので、ここに取り上げておきたいと思う。

廣池は、明治三〇年頃に国体論の研究に着手し、明治三七年頃に古聖人の真精神の探求を開始し、明治四二年頃に宗教の信仰を得るといった「精神的過程」を経ることによって、「私の最高道徳的精神ならびに行為の基礎が確定するに至った」と述べている（『回顧録』一二七―一二九ページ）。その結果、廣池は、「全世界の人類の精神を根本的かつ合理的に開発して、これに



安心及び幸福を与えたいという希望が、私の精神の底より湧き出ずる」ようになったと述べている。この「希望」を実現するには、「世界諸聖人の教説・教訓及びその実行に一貫するところの道徳の最高原理を、世界の文明人に体得させることよりほかない」と捉え、更に、「その道徳の最高原理を文明人に首肯させるには、その原理が人類の発達及び幸福の原理と一致する理由を、現代もつとも進歩せる諸科学によりて証明するにありと考え」、また、「この権威ある道徳説を教育的に、上は大学より下は国民教育に至るまで文明人の間に普及させたならば、この悪化せる現代世界の人心は比較的すみやかに合理的に開発せられ、かつ救済さるるであろうと考え」て、「モラル・サイエンス (Moral Science) の研究を思い立った」としている（『回顧録』二二九―三〇ページ）。

この説明には、廣池の最高道徳的精神・行為の基礎が確定した後、モラルサイエンスの構想に至る間の年代的情報がないので、「モラル・サイエンス (Moral Science) の研究を思い立った」のは、はたして、大正二年なのか、大正六年頃なのかといったことは、わからない。しかし、これで、廣池が、大正二年に天理教初代管長と相談決定してモラルサイエンスの研究に着手するよりもずっと以前から、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の内容を形成することになる研究に取り組んでいたことがわかる。

廣池は、大正二年に教理研究者として初代管長に迎えられ、教理研究とモラルサイエンス研究に着手したということ、『日記』に記していることはすでに取り上げた。このモラルサイエンス研究は教理の科学的・学問的研究ということで、そこには現代科学の成果のみならず、廣池が年来取り組んできた国体研究や聖人研究の成果が注入されることになった。初代管長没後の天理教本部でモラルサイエンスの価値が認められることはなかったが、廣池は、モラルサイエンスを「箇人の事業」として推進し、廣池が若年の頃から探求してきた科学的研究ならびに国体研究・聖人研究を基礎として、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』を完成したのである。

(六) 謄写版『ザ・モラル・サイエンス』に「訂正」を行って『論文』を完成・出版した時期

― 昭和二年八月一七日から昭和四年

廣池が六一歳から六三歳の時期である。この時期、完成にこぎつけた謄写版『ザ・モラル・サイエンス』に、修正、加筆、組換え等を行って『論文』を完成し、出版にこぎつけた時期である。

謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の訂正

昭和二年九月二三日に、廣池は諸岡長蔵宛書簡で、「日本文

も謄写版に清書して見れば、中訂正を要する所これ有り、目下十四章と外の翻訳に渡す所とを入念訂正致しおり候」(#)  
と、謄写版の完成原稿を更に訂正していることを伝えた。実際、『論文』が完成するまでに、まだまだ訂正だけでなく、修正、加筆、組換え等が行われていくことになる。

『論文』の本文には、「今日」と記された後に割注で西暦何年と記された箇所がある。このような記述を手がかりとして謄写版『ザ・モラル・サイエンス』に対する修正の様子を探っていくことにしよう。

例えば、割注で「一九二七年」、つまり、昭和二年と記された箇所があるが、これだけでは、謄写版が完成した「昭和二年八月一七日」以前か以後かの判定がつかない。そこで、初版本の『論文』の記述と謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の該当箇所とを比較してみることにした。すると謄写版にはない「一九二七年」という記事が『論文』にはあることが判明した。例えば、『論文』初版本一九一五(新版七冊目二七)ページの「一九二七年」である。これは、明らかに、謄写版完成以降に加筆された記事と判定することができる。更に、「今日」として割注で「一九二七年十一月二十九日此文章起草の日」(『論文』初版本二一九四ページ、新版七冊目三二二ページ)と記された記事、「現代」として割注で「此文一九二八年起草」(『論文』初版本二四六九ページ、新版八冊目二二六ページ)と記された記事、「今

日」として割注で「一九二八年」(『論文』初版本二六〇七ページ、新版八冊目三六五ページ)として記された記事などを挙げる  
ことができる。

『論文』の目次と謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の目次を比較してみると、数多くの修正が施され、組換え、新たな「節」の挿入などがなされていることが判明した。例えば、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』と『論文』初版本の「第十四章第九項」を比較し、顕著な例をいくつか示すことにしよう。

第九項の表題は、次のように「伝統」を表す英語が改められている。

第九項 最高道徳にては伝統 (Line of Succession) を重んず  
第九項 最高道徳にては伝統 (Ortholinion) を重んず

この「Line of Succession」から「Ortholinion」への変更が行われているので、「Ortholinion」という語の確定に関する経緯を述べておくことにしよう。

昭和二年九月一六日に、助手の鈴木利三郎は廣池に、「謹啓／＼……二、第九項の「伝統」の項二つについての新補充文ギリシヤ語の件二つについて(即ちオルトス、リノンの日本訳二つについて)一応吉岡教授ニも伺ふ為め大岩先生に一寸見て戴き申候間、一、

二日延期致すかとも存ぜられ候」(＃)と連絡している。この頃から「Ortholinon」の検討が始まっていたことがわかる。

更に鈴木利三郎は、廣池に、「伝統の主体」の訳語確定に当たって、その意味を次のように尋ねている。「伝統の主体」とは「神」を指すので御座いましょうか。もし然りとすれば、サブスタンスといふ語にて適当と存じますが、もしそうでないと致しましたならば、如何なる意味で御座いましょうか。御説明に従つて適當の訳語を定めたいと存じます。」(＃、九月であるが日付不明)

このように、「伝統」を英語で表現しようとするとなかなか難しく、tradition、succession、Line of succession と模索が続いたが、「Ortholinon」に確定されることになった。確定の時期について廣池は、昭和三年と述べている。「モラロジーにて重大なる意味を有するオーソリノン (Ortholinon 伝統) と云う術語は翌三年英語の専門家たる大岩教授とギリシア語の専門家吉岡教授との御指示によつて決定致したものであります。」(『旧』紀要』第一号、五ページ)

さて話を元に戻し、第十四章第九項の本文に対する加筆修正の例を示すことにしよう。

謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の「第八節 君主と国家との関係は国によりて異なるも之を伝統として尊重すべき理由

は同一なる事を述べ」は、『論文』では「第九節 国体・政体及び民族性を異にするも伝統の原理は同一なる事を述べ」と、節番号が一つずれ、表題が修正され、本文も大きく修正と加筆が加えられ、記述量も増えている。

節の組換えの例としては、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の「第十四章第九項」の、「第十四節 三伝統中特に国家伝統の重要な理由」が、『論文』では「第八節 特に国家伝統の重要な理由を述べ」と表題が修正され、本文にも相当量の修正が施されている。

新たな節の設定も見られる。『論文』の「第十節 近世独逸帝国の成立の原因及び其崩壊の原因を略記して国家伝統に関する教育の世界各国の国民に必要な事を述べ」である。

更に、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』の「第十一節 精神的伝統」は、『論文』の「第十三節 精神的伝統」となり、節番号がずれただけでタイトルに変更はないが、本文は大幅に加筆されている。

このように、廣池が、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』完成後も修正を継続していたことの一端が明らかとなった。

#### モラロジーと最高道徳

昭和三年一〇月一日に、廣池は「自序第二」を認めた。その出だしは、「そもそも本書は新科学モラロジーを確立するた

めに作りしものにして、モラロジーの基礎原理を開示せるものなりとす」(# )という文章である。更にまた、出版直前の昭和三年一月六日には、「モラロジー及び最高道徳は、天祖を首め世界諸聖人が無我・慈悲の精神をもって世界の人心を開発してもってこれを救済せんとせし努力の結果を学問的に組織せる新科学であり且つ新道徳である」(# )と、その特徴を明確に説明している。

#### 伊勢神宮参拝

昭和三年一月三日に、廣池は門人を伴って、伊勢神宮に参拝し、御礼と祈願を行っている。このときの「両宮参拝祈願条項」は、「一、宝祚万歳の御祈願。／二、国家の安泰、世界の平和及び全人類幸福の祈願。／三、モラロジー完成の御礼。／四、モラロジーの普及に対する御守護の御願。／五、モラロジー研究所及びソサイティ関係者一同の幸福祈願」(# )であった。ここでは、少し早めではあるが、「モラロジー完成の御礼」としていることに、注目したい。

#### 『道徳科学の論文』の出版

昭和三年二月一八日に廣池は、諸岡長蔵宛書簡で、「昨十七日夜、漸く一切を終り……お蔭様にて世界未曾有の大事業の最初の事業も、ここに完成の運びに立ち到り、誠に感謝つかま

つりおり候」(# )と書いている。具体的には、「十七日夜分」まで、翌「十八日中に植字致さずはす」の「正誤表を仕上げ」ていたのである「#」。

廣池は、「モラル・サイエンスによりてなるところの新科学」は「純然たる一つの独立せる精神科学である」として、それに「モラロジー (Morality)」とこう学術名 (Technical term) を与えた (『回顧録』一三二ページ)。モラルサイエンスという言葉は、研究成果である著作名に採用され、謄写版は『ザ・モラル・サイエンス』、これに加筆修正を施した『道徳科学の論文』(A Treatise on Moral Science) の書名は、『エ・イ・トリートエ・オン・モラル・サイエンス』の日本語訳であり (『旧紀要』第一号、五ページ)、謄写版のタイトルにある「ザ」を「エ・イ・トリートエ・オン」と変更して著作内容をよりの確に表現したものである。また、「モラル・サイエンス」と「モラロジー」の関係は、タイトルの前に、小文字で「新科学」としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての「と入れることで明確化されている。この書名の変更は、「昭和二年の夏」(『旧紀要』第一号、五ページ) に行ったと、廣池は述べている。

『論文』は、昭和三年二月二五日に出版された。翌二六日に、廣池の意を受けた中田中が、成田の諸岡長蔵に『論文』を持参している (『日記3』二三四ページ)。「論文」を受け取った

諸岡は、二日後の二八日の廣池宛書簡で、「右は年来の御丹精ニより愈々御完成ニ相成り誠ニ御同慶之至リニ不堪候。本島以來之事を思ひば殆ど夢の如く全く先生の御至誠により神明の御加護を垂れ給ひる事と奉恐察候。これよりハ御宣伝の御苦勞により全世界の人類を御救済せらるる事と指を屈して共々御樂み申居候。／先は一言御喜びの御挨拶まで申述度要用如斯御座候」(＃)と、廣池と苦勞を共にして完成を迎えた喜びを伝えている。

(七) 『論文』出版後に行つた教導職辞職・神恵講返納と天皇陛下に

『論文』を献上した時期

— 昭和四年一月から同年三月

廣池が六三歳の時期である。これは、『論文』を出版した後、廣池にとっての「潜在的伝統」である天理教の教導職を辞職し、神恵講を返納し、「顕在的伝統」である天皇陛下に『論文』を献上した、時期である。

#### 教導職辞職と神恵講返納

『論文』が出版された後、昭和四年一月二〇日に廣池は、天理教二代管長に挨拶をし(『日記3』二四四ページ)、その翌日に、天理教の教導職辞職と神恵講返納の手続きを行っている。この時の様子は『日記』に、「山沢先生、松村幹事御快諾下さ

る」(『日記3』二四四ページ)と記されている。同年一月二四日には、「教導職辞職聴許ちようきよ、神恵講返納受理の指令および書面」(『日記3』二四七ページ)を受け取った。同年二月六日の諸岡長藏宛書簡で、廣池は、「辞職聴許の指令、公然昨日参り候間、……この上いよいよ神様に対する責任は重く相成り候事、自覚を新たにつかまつりおり候」(＃)と記している。廣池はここに新たに神と直面しつつ、モラロジーの精神伝統として歩み始めることとなったのである。

天皇陛下に『論文』を献上

昭和四年三月八日には、「聖上陛下、皇后陛下、皇太后陛下、澄宮殿下へ献本のため、中田、香川随行して宮内省に出頭」し、「献本の係官羽田稔氏」により、献本の手続きが取られた。『日記』には、「まずこれにて博士の至誠天に通ず」と他筆で記してある。(『日記3』二五一ページ)

#### むすび

『論文』に至るモラルサイエンス研究の形成過程を簡潔に振り返っておこう。モラルサイエンス研究は大正二年に、廣池を教理研究者として天理教本部に招き寄せた天理教初代管長と相談してスタートしたということになっており、このことは『日



『記』に明記されている。しかし、これは相談の間に、広く学問的経験を積んできた廣池の方から、天理教教理そのものの研究に加えて、科学的・合理的研究の必要性を述べ、その提案が認められてスタートしたということではないかと、私は推測している。廣池は、初代管長が逝去した大正四年以降、モラルサイエンス研究は個人的事業となったと述べている。大正五年に、廣池は、学問研究を三年間中止すると誓いを立て、人心開発救済と自らの心の立て替えを目標に、全国各地をめぐる講演活動に邁進した。その間に、モラルサイエンスの構想は廣池の心の中で次第に明確化していった。大正八年に、長期にわたる過密な講演活動で疲労困憊した廣池に手を差し伸べたのが本島支教会の片山好造会長であった。モラルサイエンス研究は、本島に滞在して取り組む間に大いに進展し、大正一二年には、最高道徳を中核とする科学的研究の構想が固まった。この大正一二年に、廣池は、伊豆の畑毛温泉に滞在して執筆を開始し、大正一四年にはモラルサイエンスに「伝統」概念を導入する決断を行った。この後、廣池は、宗教の「伝統」を「潜在的伝統」とし、世界諸聖人等の「伝統」を「顕在的伝統」とする「伝統の原理」を確定し、昭和二年に、モラルサイエンス研究の成果を謄写版『ザ・モラル・サイエンス』として完成し、これに更に修正加筆組換等を行って、昭和三年に、長年に亘る廣池の学問的研究と道徳的実践のすべてを注ぎ込んだ『道徳科学の論文』

を完成し、出版したのであった。

この間に、特に重要と思われる事蹟を一つ指摘するならば、それは廣池が、「モラル」<sup>「サイエンス」</sup>に伝統のこと、何らかの形式にて入れます」と誓いを立てたことであると思われる。「モラルサイエンス」に「伝統」が導入されたことで、モラルサイエンス研究は、廣池が若い頃から取り組んできた聖人研究・国体研究の成果を取り込んで、再組織化され、科学的・学問的な体系として確立されることになったのである。謄写版『ザ・モラル・サイエンス』並びに『論文』は、廣池が天理教の信仰を得る以前から手掛けていた研究の延長線上に成立した学問的成果である。しかし、これらの成果は、天理教の教理研究者として宗教的・道徳的実践を経なければ結実することのなかった成果でもあると私は考えている。廣池は、諸聖人が自己の「伝統」を重んじたことに倣い、更に一步踏み込んで、「伝統の原理」を確立し、「顕在的伝統」と「潜在的伝統」を確定し、その「恩沢」に報いる「報恩」の道を切り拓いたのである。

\*

廣池は、この後、昭和六年にモラロジーによる社会教育、更に、昭和一〇年に学校教育に着手した。この間に、昭和三年に出版された『論文』は訂正増補を施され、昭和九年六月二十五日に『論文』第二版として出版され、社会教育、学校教育の基本テキストとしてモラロジー教育の中心的役割を担うことにな

り、更に昭和六一年四月五日に『新版 論文』が発行されて、今日に至っている。

#### 参考文献

- 廣池千九郎著『廣池千九郎日記1』広池学園出版部、昭和六〇（一九八五）年六月四日、初版第一刷発行。
- 廣池千九郎著『廣池千九郎日記2』広池学園出版部、昭和六一（一九八六）年一月一〇日、初版第一刷発行。
- 廣池千九郎著『廣池千九郎日記3』広池学園出版部、昭和六一（一九八六）年六月四日、初版第一刷発行。
- 廣池千九郎著『道德科学の論文』（非売品）著者兼発行者廣池千英、昭和三（一九二八）年二月二五日、「初版」発行。
- 廣池千九郎著『新版 道德科学の論文』広池学園出版部、昭和三（一九二八）年二月二五日、初版発行、昭和六一年四月五日、「新版」第一刷発行。
- 廣池千九郎著『回顧録』広池学園出版部、平成三（一九九二）年一月一〇日、初版第一刷発行。
- 『モラロジー研究所紀要』第一号、昭和六（一九三一）年二月一日。
- 『廣池千九郎日記 用語解説』広池学園出版部、平成六（一九九四）年六月四日、初版第一刷発行。
- 天理大学おやさと研究所編『天理教事典』天理教道友社、一九七七年。
- 栗原英二著『経路（トホツタミチ）——広池博士の救済への願い』広池学園出版部、平成元（一九八九）年、初版発行。

\* 本稿は、二〇二二（令和三）年一月一三日（土曜日）に行われた、「オンライン道德科学研究フォーラム「廣池千九郎の真精神に学ぶ」」で発表した原稿に大幅な加筆・修正を行ったものである。

\* 宗中正道德科学研究所副センター長所蔵の『道德科学の論文』の初版本を見せていただき、内容的確認をすることができた。ここに記して謝意を表したい。

\* ピーター・ラフ (Peter Luff) 道德科学研究所客員教授にネイティブ・チェックを依頼し、そのことがきっかけとなり、二〇二二年九月二三日に、廣池のモラルサイエンス研究の方法論に関する話し合いを行った。本文に収録した、「外国書の購入状況」は、ラフ教授と行った話し合いを踏まえて私が行った調査結果をもとに作成したものである。ここに記して謝意を表したい。

(キーワード：廣池千九郎、モラルサイエンス、モラロジー、「伝統」、謄写版『ザ・モラル・サイエンス』、『道德科学の論文』)

